

神戸大学・小野市 地域連携事業

あ お の が は ら ふ り よ

青野原俘虜収容所展

in Tokyo 2009

主 催：神戸大学
兵庫県小野市
オーストリア大使館

発刊にあたり

神戸大学 地域連携推進室長
奥 村 弘



神戸大学は、教育と研究と並ぶ第3の使命として、社会との連携・協力を重視しています。学内に連携創造本部、地域連携推進室、各研究科地域連携センターなどを置き、大学の知的研究成果の社会への還元のために、人的・物的資源を活用する事業に取り組んでいます。

その一環として、2005年1月に、小野市との間で社会文化の領域での連携事業に関する包括協定を結びました。これは本学最初の自治体との包括協定であり、協定に先立って進められてきた本学教員による歴史文化についての地域連携を大学として発展させていくためのものでした。

協定締結以来、大学院人文学研究科（文学部）地域連携センターを中心にして、小野市立好古館との間で、地域の「記憶」を次世代に伝えていくための事業をすすめてきました。市域各地で地元の方々と協力して地域の歴史文化を掘り起こし、市民の歴史として深めて行く「地域展」などの取り組みが、現在も継続しています。

その中で、小野、加西、加東にまたがる地域に、第一次世界大戦期に青野原俘虜収容所が置かれ、そこでオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が暮らしており、地元の人たちの生活や文化に大きな影響を与えたことが明らかになってきました。

小野市と本学は、その豊かな交流の歴史を、地元の方々とさらに掘り起こして研究を進めるとともに、収容所での音楽会を、本学の音楽・芸術関係教員と神戸大学交響楽団の協力で再現するなど、大学と自治体の連携によってはじめて可能となる取り組みを進め、その成果を市民に還元してきました。

青野原俘虜収容所の歴史研究から、第一次世界大戦期の世界史的な研究も深まり、その中で2008年には、捕虜の故国の一つであるオーストリアで、その成果を発表、再現音楽会を開催するという取り組みを行いました。小規模な自治体が大学との連携を通して、外国の公文書館と共同で展示会を行うという、日本ではじめての取り組みを進めることができました。

2009年、東京のオーストリア大使館で行われた「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」は、小野市、本学、オーストリアの連携による、地域と世界を結んだ歴史文化の研究とその成果の社会への還元というこの取り組みを、オーストリアでの成果を踏まえて、首都圏で行うことで、いっそう発展させていくことを目指したものでした。神戸大学の東京オフィスの協力と、同様の収容所が存在した千葉県習志野市の方々と新たな連携により、当初私たちが考えていた以上に豊かな内容を持つ取り組みが可能となったと考えています。

この小冊子は、その内容の概略をまとめたものです。ご味読の上、様々なご意見をいただければと考えております。

最後になりますが、本取り組みを共に進めていただいた小野市の市民や自治体職員の方々、オーストリアの研究者と大使館関係の方々、東京の神戸大学同窓会関係の方々をはじめ、習志野市の関係者の方々、神戸大学交響楽団や本学教職員や学生、そのほか様々なところで支えていただいた多くの方々に深く感謝するとともに、今後ともさらなるご協力、ご支援をお願いする次第です。

主な関連報道

- 10月9日 日本経済新聞
捕虜に見る欧州史の断片 兵庫県の1次大戦収容所に
ハプスブルク帝国の縮図 (大津留教授 署名記事)
- 10月17日 毎日新聞(都内版)
資料展：第一次大戦中、兵庫に収容所
- 11月5日 朝日新聞(東京版)
第一次大戦時、兵庫の収容所 捕虜の演奏再現
- 11月5日 神戸新聞
「望郷の響き」神大生が再現 東京で7日に演奏会
- 11月10日 読売新聞(都民版)
捕虜の「素顔」しのぶ60点 12日から資料展
- 11月10日 神戸新聞
写真の撮影地特定 青野原俘虜収容所の関連資料
- 11月13日 神戸新聞
「青野原俘虜収容所」資料展 戦争捕虜の生活思いはせ

開催意義

神戸大学では、第一次世界大戦当時、青野原俘虜収容所のあった兵庫県小野市とオーストリア大使館とともに、オーストリア・ハンガリー兵の俘虜（捕虜）たちと地元の人たちとの交流の様子を広く知っていただく事業として、「青野原俘虜収容所展 in Tokyo」を開催することになりました。

1869 年 10 月、日本とオーストリアとの間で修好通商航海条約が締結され、両国の外交関係が開設されました。2009 年は、日本とオーストリアとの外交関係樹立 140 年という記念すべき年にあたります。また、1919 年 6 月に、第一次世界大戦の講和条約が結ばれてから 90 年の節目にあたる年でもあります。

本事業は、日本オーストリア両国の友好関係をより強固なものになることを願い実施される「日本オーストリア交流年 2009 事業」として、外務省より認定されました。

第一次世界大戦と俘虜（捕虜）

第一次世界大戦当時、現在の兵庫県小野市、加西市にまたがる青野原には捕虜（俘虜）収容所があり、500 名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が 4 年 4 ヶ月にわたり生活していました。中国の青島を含む膠州湾地方は 1898 年以来ドイツの租借地でしたが、第一次世界大戦が始まると日本軍はここを攻撃、占領しました。その時捕虜になったオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵は日本各地に設置された捕虜収容所に収容されました。青野原に収容されたのはその一部です。

この中には、折から青島に寄港していて、第一次世界大戦の開始とともにドイツ軍に合流したオーストリア・ハンガリーの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」号の乗組員も含まれていました。したがって、ドイツ、オーストリアだけでなく、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、クロアチア、スロベニア、北イタリアなどの出身者が、「独軍俘虜」として日本の各地で暮らすことになりました。青野原収容所の特徴は、これら日本に収容されたオーストリア・ハンガリー兵の約 8 割が収容されたことにあります。

青野原俘虜収容所調査とその成果の公開

1992 年、小野市と神戸大学は、小野市史の編纂を通じて、青野原俘虜収容所の調査研究に着手しました。その後、2005 年には小野市と神戸大学の間で、教育や社会文化に関する連携事業を進める包括協定が結ばれ、調査研究の成果を小野市で公開しました。

小野市には、今でも当時の様子を記録した新聞や写真のほか、オーストリア兵たちが行った演奏会や演劇の案内チラシなどの資料、展示即売した作品などが数多く残され、当時の交流の様子を身近に知ることができます。2005 年には演奏会のチラシに基づいて、捕虜たちが演奏した曲目を神戸大学交響楽団有志が再現するという試みも行われました。翌 2006 年には、神戸大学でも展示会、演奏会を開催し、大学内にも地域連携事業の成果が目に見える形で示されました。さらに 2008 年にはこうした成果を、捕虜たちの故国の一つであるオーストリアの国家文書館で展示し、同時に神戸大学交響楽団有志による捕虜の演奏会の再演を国家文書館と軍事史博物館で行いました。

青野原俘虜収容所展 in Tokyo

2009 年の東京での展示会の開催は、これまでの成果の上に立ちながら、さらなる展開を図るものです。この展示会は在日オーストリア大使館の全面的協力の下で行われ、国際交流のさらなる発展が期待できます。またこれまでの地域史の視点、グローバルな視点に加え、国家史の視点から青野原収容所を捉える契機とするものでもあります。

第一次世界大戦当初東京・浅草にあった捕虜の収容施設は習志野市に移りました。今回の東京展示会は、外交文書館、防衛研究所、習志野市教育委員会、ドイツ文化センターなどの協力を得ながら、第一次世界大戦当時の日本の捕虜収容所の総合的研究の一環をなすことを一つの狙いとしています。

調査活動の継続の中で、小野市に現存する「刺繍」に書かれていた名前から、青野原収容所の捕虜の遺族にたどり着く可能性もでてきました。昨年見つけた、当時の約 500 枚の写真の撮影された場所を特定する作業も継続中です。今回の展示の中でも一部その成果を生かしたいと考えています。また、写真には弦を中心とした楽団の様子も写っており、今回の演奏会ではより当時の姿に近づけようとしています。習志野の市民グループの協力も得て、新しい企画で俘虜が異国で奏でた調べに耳をかたむけてもらえればと思います。

地域から世界へ、そして日本の中での研究ネットワークの拡がりへ。地域と大学との新しい地域連携像の提示を試みていきたいと考えています。

講演会・再現演奏会

11月7日(土)

ドイツ文化会館OAGホール(東京都港区)

講演会・再現演奏会は、オーストリア史の研究家であるとともに、音楽会運営経験も豊富な武藤真也子氏の司会のもと、OAGホールにほぼ満員の来場者を迎えて行われました。

講演会は「青野原俘虜収容所の世界」と題し、奥村室長と小野市立好古館の大村敬通館長による挨拶の後、神戸大学人文学研究科の大津留厚教授、神戸大学名誉教授であり、現・東京未来大学の岸本肇教授、グラーツ大学のヘルムート・ヘードル氏によって、俘虜の生活やスポーツ活動などに関する講演が行われ、俘虜収容所に関する知識・理解を深めました。

再現演奏会では、千葉県習志野市を拠点とする「町の音楽好きネットワーク」の6名による、習志野俘虜収容所に関するスライドを交えた演奏・歌唱が披露されました。スライドでは、習志野収容所にいた音楽家、ハンス・ミリエスを中心に紹介され、彼の音楽活動とともに、収容所でのビア・パーティーやクリスマスの集いといった生活の様子も紹介されました。

また、神戸大学交響楽団有志による演奏も行われ、約200名の聴衆を90年前の収容所の世界に誘いました。これは最近発見された音楽会の写真を参考に、当時の音楽会を楽団編成及び曲目から再現する試みです。神戸大学交響楽団有志の皆様には、小野市エクラホール(2005年)、神戸大学瀧川記念学術交流会館(2006年)、ウィーン国家文書館及び軍事史博物館(2008年)での再現演奏会に続き、御協力をいただいています。



小野市立好古館 大村館長



人文学研究科 大津留教授



岸本神戸大学名誉教授
(現・東京未来大学教授)



グラーツ大学 ヘードル氏



神戸大学交響楽団有志は、新たに発見された当時の写真の解析結果を元にした編成で、若さ溢れる演奏で90年前の音楽会を再現しました。



「町の音楽好きネットワーク」の皆様は、習志野収容所の紹介を交えつつ、見事な演奏・歌唱で聴衆を魅了しました。

神戸大学・小野市 地域連携事業
日本オーストリア交流年 2009 認定事業

主催：神戸大学 小野市 オーストリア大使館
後援：習志野市教育委員会

お問い合わせ先
神戸大学研究推進部研究推進課
研究・地域交流企画係
Tel: 078-803-5029 Fax: 078-803-5049
e-mail: ksuichiiki@office.kobe-u.ac.jp

神戸大学地域連携推進室
http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chitiki/

第一次世界大戦期
あおのがはらふりょうしゅうじよとん
青野原俘虜収容所展
in Tokyo 2009
講演会・再現演奏会
日時：2009.11.7(土)
17:00～(開場 16:30)
会場：東京都港区
ドイツ文化会館 1階 OAGホール
(東京メトロ銀座・半蔵門線 都営大江戸線
青山一丁目駅 4番出口より徒歩約10分)

第一次世界大戦当時、青野原(現兵庫県小野市、加西市)には俘虜収容所があり、500名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が4年4ヶ月の間生活していました。神戸大学と小野市は、地域連携事業の一環として、青野原俘虜収容所の調査研究をおこない、その成果を小野市(2005年)・神戸大学(2006年)・ウィーン(2008年)と公開してきました。

ベルサイユ講和条約締結から90年目の今年、オーストリア大使館の全面的協力の下、外文文書館、防衛研究所、ドイツ文化センターなどの協力を得ながら、資料展、関連講演会、再現演奏会を開催します。

90年前の俘虜たちの生活に思いをはせ、彼らが異国の地で奏でた音楽に耳をかねてみてください。

-PROGRAM-
講演会 ～青野原俘虜収容所の世界～
大津留 厚(神戸大学)
岸本 肇(東京未来大学：神戸大学名誉教授)
ヘルムート・ヘードル(グラーツ大学)

再現演奏会
～曲目～
モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク
ヴェーバー：舞臺への勧誘
シュトラウス：美しく青きドナウ
ヴェーダー：夢
ベートーヴェン：エグモント序曲
シューベルト：軍隊行進曲第1番 他

～演奏～
神戸大学交響楽団有志
町の音楽好きネットワーク
(習志野市在住の演奏家仲間)

入場無料
※観覧をご希望の方は裏面の申込書にて、事前にお申し込みください。

資料展示会

開会式：11月11日(水)
一般開放：11月12日(木)～21日(土) ※日曜除く
オーストリア文化フォーラム(オーストリア大使館内：東京都港区)

資料展示会は、オーストリア文化フォーラムにて行われました。展示品は好古館より、当時の風景を残した写真資料や、俘虜製作品である刺繍や煙草道具などが陳列され、来場者の視線を惹きつけました。

同所で行われた開会式では、オーストリア大使館よりミハエル・ハイダー文化担当参事官、小野市より陰山茂教育委員会教育長、神戸大学より中村千春副学長・地域連携担当理事が挨拶を行いました。また、大津留教授より展示品についての説明があり、出席者の理解を深めました。

9日間の開催期間で約180名の方々が会場を訪れ、俘虜達の日々の生活に思いをはせました。

開会にあたって

オーストリア大使館文化担当参事官 ミハエル・ハイダー

日本とオーストリアの友好関係が築かれて140周年にあたる2009年は、オーストリア日本年として位置づけされていますが、この機会にオーストリアと日本の共通の歴史の知られざる一コマがここに明らかにされることは大きな喜びであります。

第一次世界大戦のとき、約500名のオーストリア・ハンガリーおよびドイツの捕虜が小野市に近い青野原収容所に収容されていました。そのうちオーストリア・ハンガリー捕虜兵の多くは巡洋艦・皇妃エリーザベト号の乗組員でした。大戦が勃発すると、皇妃エリーザベト号に乗り組んでいた兵士たちは、ドイツとの同盟関係に基づき、青島防衛のために日本軍、イギリス軍と戦わなければならませんでした。

第一次世界大戦が終わると皇妃エリーザベト号に乗り組んでいた兵士たちも帰還することになりましたが、その時にはオーストリア・ハンガリーはすでに消滅していました。帰還兵たちは、新たなヨーロッパ情勢の中に置かれた新興国家へと帰路に着きました。ヨーロッパはもう一度戦争を経験し、さらにその後の50年にわたる分断の時期を経て、オーストリア・ハンガリーの継承国家の多くは対等のパートナーとしてEUの一員になりました。

青野原収容所の歴史に関する展示会は、2008年にはウィーンのオーストリア国家文書館で開かれましたが、同様の試みがここに実現するに当たりご協力いただいた関係機関、特に小野市、好古館、神戸大学にオーストリア文化フォーラムを代表してお礼申し上げたいと思います。また特に、永年にわたり日本で、またオーストリアで史料を渉猟し、オーストリア・ハンガリー捕虜兵の動向を研究されてきた大津留厚教授に感謝の意を表したいと思います。



開会式にて、ハイダー参事官(写真右から2番目)による挨拶。同右端は中村理事。3番目は陰山教育長。

神戸大学・小野市 地域連携事業 日本オーストリア交流年2009認定事業

第一次世界大戦当時、青野原(現兵庫県小野市、加西市)には俘虜収容所があり、500名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が4年4ヶ月の間生活していました。

神戸大学と小野市は、地域連携事業の一環として、青野原俘虜収容所の調査研究をおこない、その成果を小野市(2005年)・神戸大学(2006年)・ウィーン(2008年)と公開しています。

ベルサイユ講和条約締結から90年目の今年、オーストリア大使館の全面的協力の下、資料展を開催します。



第一次世界大戦期
あわの原はら
青野原
俘虜収容所展
in Tokyo 2009
会 期：2009.11.12 (木) ～
2009.11.21 (土) (日曜休館)
開館時間：11:00～18:00
※11.21(土)のみ11:00～13:00
会 場：東京都港区 オーストリア文化フォーラム
(オーストリア大使館内)
(都営大江戸線・東京メトロ南北線
麻布十番駅 ④出口より徒歩約5分)
神戸大学研究推進部研究推進課研究・地域交流企画係
TEL:078-803-5029 FAX:078-803-5049
e-mail:kshu-chiki@office.kobe-u.ac.jp
神戸大学地域連携推進室
HP: <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiki/>
JAPAN-AUSTRIA 2009
主催：神戸大学 小野市 オーストリア大使館



俘虜製作品である刺繍を前に説明を行う大津留教授(右から2番目)。左端は「町の音楽好きネットワーク」戸田志香氏。



当時の写真記録について説明する奥村室長(左側)。

神戸大学・小野市 地域連携事業 日本オーストリア交流年 2009 認定事業



2008.8.20 神戸大学内にて

主 催：神戸大学
兵庫県小野市
オーストリア大使館
後 援：習志野市教育委員会



演 奏

神戸大学交響楽団有志

パート	名 前	学年	所属学部等
Flute	山本 文音	4	発達科学部
Oboe	奥田 桂子	4	発達科学部
Clarinet	楠根 貴成	3	理学部
Fagotto	赤松 美沙	4	農学部
Horn	秋元 美衣瑠	3	法学部
Piano	近藤 美里	4	発達科学部
Organ	江頭 那美	3	工学部
Violin	江口 雄人	4	発達科学部
	藤本 佳奈子	4	法学部
	竹中 ゆき奈	4	神戸女子大学
	野村 朋加	4	医学部
Viola	別府 真衣	2	発達科学部
	佐藤 綾香	3	医学部
Violincello	鈴木 智子	3	理学部
	深尾 諒	4	法学部
Contrabass	雲 財 啓	4	発達科学部
指 揮	木下 麻由加	4	発達科学部
楽譜制作	栗野 文平	4	経営学部

神戸大学交響楽団は結成から 100 年近い歴史を持ち、現在は総勢 120 名を超えるメンバーで活動しています。今回は収容所での当時の音楽会を再現するための特別編成で演奏します。

神戸大学交響楽団 Web ページ
<http://home.kobe-u.com/symphony/>

はじめに

2009 年は日本とオーストリア (1869 年当時は、オーストリア・ハンガリー帝国) の間に修好通商航海条約が結ばれてから 140 年、第一次世界大戦の講和条約がベルサイユで結ばれてから 90 年という節目の年に当たります。その第一次世界大戦当時、青野原 (現・兵庫県小野市、加西市) には俘虜収容所があり、500 名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が 4 年 4 ヶ月の間生活していました。

神戸大学と小野市は、2005 年に地域連携協定を結んでいます。その地域連携事業の一環として、青野原俘虜収容所の調査研究をおこない、その成果を小野市 (2005 年) - 神戸大学 (2006 年) - ウィーン (2008 年) と公開してきています。収容所で俘虜たちが自身の余暇のために進んでいた音楽会を再現する「再現演奏会」も、神戸大学交響楽団の協力を得て開催してきました。

今年は、オーストリア大使館の全面的協力の下、外交史料館、防衛研究所、習志野市、ドイツ文化センターなどの協力を得ながら、資料展、関連講演会、再現演奏会を開催します。千葉県習志野市を拠点とする「町の音楽好きネットワーク」の皆様は、習志野にあったドイツ兵俘虜収容所での演奏会を再現する試みを行ってられ、今回の御参加につながりました。

これら一連の取組みは、大学における地域連携事業が国際的に展開する新たな可能性を示すものになっていると考えております。

90 年前の俘虜たちの生活に思いをはせ、異国の地で奏でた音楽に耳をかたむけてください。



2008.9.5 ウィーン・軍事史博物館にて

演 奏

町の音楽好きネットワーク

町に音楽の花を咲かせようと活動している演奏仲間。
本拠地は習志野市大久保。

パート	名 前
声	大田中 早苗
	戸田 志香
グランドピアノ	樋口 菜穂美
フルート	林 涼子
ピアノ	林 麻由美
	高砂谷 麻子

「音楽をなりたいにする人の顔が見える町っていいなあ」と大久保 (千葉県習志野) を拠点に活動を始めた町の音楽好きネットワーク。通称「町ネット」の活動は今年で 13 年目になります。

演奏をする人、聴く人、音楽が好きなら誰でも町ネットの仲間です。音楽会にいらしてお客さまのひと言「ここに住んで良かった」が私たちの励みです。

昨年 7 月の町ネットコンサート「柵を越えた MUSIC」では習志野俘虜収容所で奏でられた調べを紐解きました。「恋はやさし 野辺の花よ」で始まる前半は大正時代、巷で流行っていた音楽を演奏し、後半は収容所内での生活をスライドで紹介し、そして頻繁におこなわれていた音楽会プログラムの中から数曲、演奏いたしました。

会場のお客さまの心に残ったことは多分、収容所で人気があったアルコールはキンビールだったということでしょう (笑)。

(文：戸田 志香)

町の音楽好きネットワーク事務局 Tel: 047-472-9706

講演会

～青野原俘虜収容所の世界～

講演者プロフィール

大津留 厚

神戸大学人文学研究科教授。ハプスブルグ帝国史、オーストリア近現代史を研究分野としている。著書として、『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵—』(山川出版社、2007) などがある。

岸本 肇

東京未来大学こども心理学部教授。神戸大学名誉教授 (元・発達科学部教授)。体育学、体育科教育を研究分野としている。論文として、「青野原俘虜収容所捕虜兵のスポーツ活動」(『体育学研究』50-3, 2005) などがある。

ヘルムート・ヘードル

オーストリア・グラーツ大学所属。自らと同じオーストリア人が収容されていた青野原俘虜収容所を修士論文のテーマとし、現在も研究が続いている。

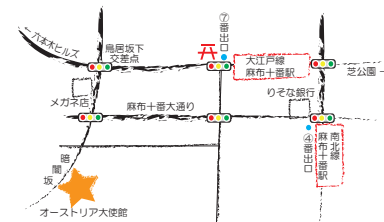
青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009 資料展示会
についてのお知らせ

本日の講演会・再現演奏会と同様に、神戸大学と小野市の地域連携事業の一環として、下記の通り「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」を、オーストリア大使館の全面的協力の下で開催いたします。

青野原の収容所に生きた俘虜達の姿を、小野市立好古館(歴史博物館) 収蔵資料を始め、様々な方面の協力によって得られた資料から振り返ります。

皆様のお越しをお待ちしております。

開催期間：平成 21 年 11 月 12 日 (木)～21 日 (土)
※ 15 日 (日) は休館日とさせていただきます。
開館時間：11:00～18:00
※ 21 日 (土) のみ 13:00 までの開館となります。
会 場：オーストリア文化フォーラム
(オーストリア大使館内)
東京メトロ南北線 都営大江戸線
麻布十番駅④⑦出口より徒歩約 5 分



お問い合わせ先

国立大学法人神戸大学 研究推進部
研究推進課 研究・地域交流企画係
Tel: 078-803-5029 FAX: 078-803-5049
E-mail: ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

神戸大学地域連携推進室
<http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

演奏曲目

町の音楽好きネットワーク

- ヴァイオリンのための
1. 閉じておくれ 僕の眼を
ハンス・ミリエス 曲 / 伊地知元子 編曲
2. アينه・クライネ・ナハトムジーク
モーツァルト 曲
3. ホフマンの舟歌
オッフェンバッハ 曲
4. 舞踏への勧誘
ウェーバー 曲
5. 閉じておくれ 僕の眼を
ハンス・ミリエス 曲 / 伊地知元子 編曲 / 根本優子 訳詞

神戸大学交響楽団有志

1. 歌劇「バグダットの太守」序曲
ボワエルデュー 曲 / 田村文生 編曲
2. 巡礼の合唱（歌劇「タンホイザー」より）
ワーグナー 曲 / 田村文生 編曲
3. 美しき青きドナウ
ヨハン・シュトラウス2世 曲 / 田村文生 編曲
4. 劇付随音楽「エグモント」序曲
ベートーヴェン 曲 / 田村文生 編曲
5. レヴリ
ヴェータン 曲
6. 軍隊行進曲第一番
シューベルト 曲

曲目解説

（長野順子・神戸大学人文学研究科教授）

町の音楽好きネットワーク

閉じておくれ 僕の眼を (1917) Schliesse mir die Augen beide

H. ミリエス (1883-1957)
Hans Millies

ハンス・ミリエスは上海交響楽団の指揮者兼コンサートマスターであったが、青島で日本軍の捕虜となった。移送された習志野俘虜収容所では、男性合唱団や交響楽団を編成してベートーヴェンやヨハン・シュトラウスらの名曲を演奏した。ドイツの音楽学校出身の彼は、習志野のこの地で美しい歌曲を作曲した。近年その楽譜が子孫の家で発見され、ほぼ 80 年ぶりに現代に蘇ることになった珠玉の作品である。

アイン・クライネ・ナハトムジーク (1787) Eine Kleine Nacht Musik

W.A. モーツァルト (1756-1791)
Wolfgang Amadeus Mozart

ザルツブルク生まれのモーツァルトはウィーンに出て、オペラをはじめとする諸ジャンルの作曲を次々に手がけ、その天与の才を発揮していった。この弦楽セレナーデ 13 番(K.525)は《ドン・ジョヴァンニ》の作曲中の時期に作られた。とくに第一楽章の澁刻としたリズムと親しみやすい魅力的なメロディは非常に有名で、ポップス等に編曲されたものも数多く耳にすることができる。

ホフマンの舟歌 (1881) Barcarolle d'Hoffmann

J. オッフェンバッハ (1819-1880)
Jacques Offenbach

フランスの作曲家オッフェンバッハは 19 世紀のポピュラー音楽であるオペレッタの作曲家として名高い。彼が唯一残した未完の歌劇「ホフマン物語」は 1881 年 2 月にパリのオペラ・コミック座で初演された。

この曲はその第四幕、主人公ホフマンとジュリエッタとの恋の場面で歌われるが、独立して演奏される機会が多い。波に揺れる 8 分の 6 拍子のリズムによってロマンティックな旋律が奏でられる。

舞踏への勧誘 (1819) Aufforderung zum Tanz

C.M.von ウェーバー (1786-1826)
Carl Maria Friedrich Ernst von Weber

ウェーバーはドイツにおけるロマン主義運動の重要な先駆者であり、《魔弾の射手》をはじめ数々の作品によってドイツ語オペラへの関心を高めた。本作品は自身が演奏するために作られた技巧的なピアノ曲で、ベルリオーズの管弦楽編曲でも広く知られる。作曲家本人の言葉がこの Rond 形式の作品をよく語っている。「ある紳士がお目当ての婦人にダンスを申込み、華麗なワルツを一緒に踊り、最後に恭しく別れる」。

神戸大学交響楽団有志

歌劇「バグダットの太守」序曲 (1800) Le Calife de Bagdad

F.A. ボワエルデュー (1775-1834)
François Adrian Boieldieu

ボワエルデューはフランスの 19 世紀前半における代表的なオペラ作曲家である。一時期ペテルブルクの宮廷歌劇場に仕えたこともあるが、故国のパリ音楽院でピアノおよび作曲の教授を長らく務めた。オペラ・コミックの伝統を引き継いで「フランスのモーツァルト」と称されたが、ベートーヴェンと同世代である。彼の特徴であるオーケストラの色彩感と豊かで親しみやすい旋律は、この曲にもよく表れている。

巡礼の合唱 (歌劇「タンホイザー」より 1845) Pilger-Chor (Tanhäuser)

R. ワーグナー (1813-1883)
Richard Wagner

ワーグナーの歌劇の有名な場面からの音楽。同歌劇の序曲と同じ雰囲気の中で曲は開始され、「巡礼の主題」が木管群によって、次に「悔悟の動機」が奏でられる。男声合唱を模した「巡礼の主題」は、ヴァイオリンの細かい音型の中で次第に高揚し、そのエネルギーは「ハレルヤ!!」の叫びで頂点を迎える。罪を許された巡礼者たちの喜びの中、曲は力強い和音で終わりを告げる。

美しき青きドナウ (1867) An der schönen, blauen Donau

J. シュトラウス 2 世 (1825-1899)
Johann Strauss II

父親も高名なウィンナーワルツの作曲家だが、息子が音楽家となることには反対していた。ヨハンは最初は大学で経済学を学んでいたが、音楽家として活動を開始すると自身で管弦楽団を設立し、やがて「ワルツ王」と称されるようになる。あまりにも有名なこの曲は、普墺戦争で大敗して失意の底にあったウィーン市民を慰めるために作曲された。合唱版も管弦楽版も現在にいたるまで広く親しまれている。

劇付随音楽「エグモント」序曲 (1810) Egmont Overture

L. van ベートーヴェン (1770-1827)
Ludwig van Beethoven

ゲーテの同名の戯曲にベートーヴェンが作曲したこの劇付随音楽は、序曲と 9 曲からなる。なかでも本日演奏される序曲は、圧政に抗し自由を求めて闘い、挫折し、処刑される英雄エグモント像の縮図となり、輝かしいコーダは正義の勝利をたたえるものである。この頃のベートーヴェンはすでに交響曲 6 番《田園》、ピアノ協奏曲 5 番《皇帝》などの力作を世に送りだし、まさにその成熟期へと向かっていた。

レヴリ (Op.22 No.3) Rêverie

H. ヴェータン (1820-1881)
Henry Vieuxtemps

作曲者はベルギーで生まれフランスで活躍した名ヴァイオリニスト。早くから才能を発揮して各地で喝采を浴び、シューマンに「小さなパガニーニ」と評された。作曲家としては特に 7 つのヴァイオリン協奏曲で知られている。この小品も原曲はピアノ伴奏つきのヴァイオリン独奏曲であるが、今回、管楽合奏用に編曲された。随所に意匠が凝らされた美しい曲となっている。タイトルは「夢想」の意。

軍隊行進曲第一番 (1826) Militär-Marsch No.1

F. シューベルト (1797-1828)
Franz Schubert

「三つの軍隊行進曲作品 51」の第一曲で、本来はピアノ連弾曲だが、管弦楽やピアノ独奏用などに幅広く編曲され親しまれてきた。3 部形式。6 小節の短い前奏に続いて第 1 マーチ・第 2 マーチからなる主部が展開されるが、前奏部分は随所に顔を覗かせる。トリオ部分では木管楽器が軽やかな旋律を奏で、その調性は短調へと色彩を変化させ、曲は冒頭へと帰属して、華やかに締めくくられる。

神戸大学・小野市 地域連携事業

日本オーストリア交流年 2009 認定事業

あおのがはらふりよ

青野原俘虜収容所展

in Tokyo 2009

主 催：神戸大学
兵庫県小野市
オーストリア大使館



開催期間：平成 21 年 11 月 12 日 (木)
～21 日 (土)
※日曜休館

開館時間：11:00 ～ 18:00
※最終日のみ 13:00 まで

会 場：オーストリア文化フォーラム
(オーストリア大使館内)

はじめに

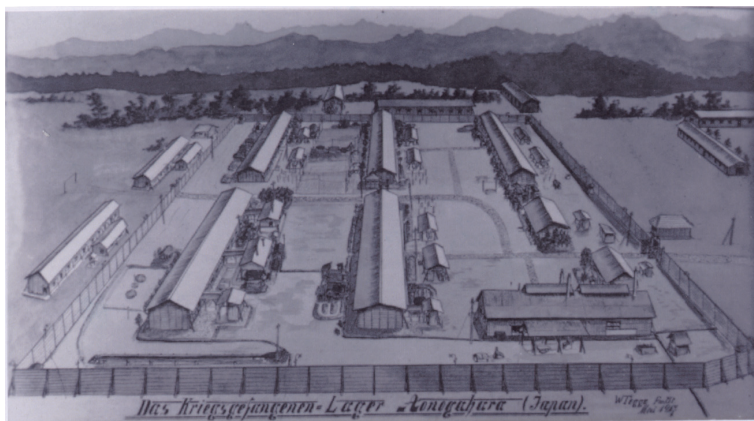
2009 年は日本とオーストリア (1869 年当時は、オーストリア・ハンガリー帝国) の間に修好通商航海条約が結ばれてから 140 年、第一次世界大戦の講和条約がベルサイユで結ばれてから 90 年という節目の年に当たります。その第一次世界大戦当時、青野原 (現・兵庫県小野市、加西市) には俘虜収容所があり、500 名近くのオーストリア・ハンガリー兵、ドイツ兵が 4 年 4 ヶ月の間生活していました。

神戸大学と小野市は、2005 年に地域連携協定を結んでいます。その地域連携事業の一環として、青野原俘虜収容所の調査研究をおこない、その成果を小野市 (2005 年) - 神戸大学 (2006 年) - ウィーン (2008 年) と公開してきています。収容所で俘虜たちが自身の余暇のために行っていた音楽会を再現する「再現演奏会」も、神戸大学交響楽団の協力を得て開催してきました。

今年は、オーストリア大使館の全面的協力の下、外交史料館、防衛研究所、習志野市、ドイツ文化センターなどの協力を得ながら、資料展、関連講演会、再現演奏会を開催します。これら一連の取組みは、大学における地域連携事業が国際的に展開する新たな可能性を示すものになっていると考えております。

今回の資料展示会では、青野原の収容所に生きた俘虜たちの姿を、小野市立好古館 (歴史博物館) 収蔵資料を始め、様々な方面の協力によって得られた資料から振り返ります。

去る 11 月 7 日には、都内にて「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009 講演会・再現演奏会」を行い、当時の俘虜たちがどのような音楽を楽しんでいたのかを振り返りました。今回の一連の行事から、俘虜たちの生きた世界はどのようなものだったのか、さらに大学における地域連携の姿とはどのようなものかを感じ取っていただければ幸いです。



青野原俘虜収容所全景図

ディルク・ファン・デ・ラン氏提供

ごあいさつ

神戸大学長 福田 秀樹

神戸大学は西日本最大の海港都市神戸に位置しています。神戸は1868年に開港し、外国人居留地が造られ、人と物との国際的な交流の拠点となってきました。その翌年、1869年に日本とオーストリアとの間で修好通商航海条約が結ばれ、両国間の外交、通商関係が始まりました。今年は両国間の外交関係開設140周年に当たります。また今回の展示会は第一次世界大戦のオーストリア・ハンガリー捕虜兵をテーマとしています。今年はその世界大戦を終結させた1919年のベルサイユ講和条約締結90周年にも当たります。この節目の年に、所縁のあるオーストリア大使館の場をお借りして、「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」を開催できることは神戸大学といたしましても大きな喜びであります。

神戸大学は、大学の使命の一つである社会貢献のために、地域連携事業を積極的に推進してきました。その一環として、2005年1月、神戸大学は兵庫県小野市と社会文化にかかわる連携事業を協同して進めるための協定を結びました。生涯学習事業や文化遺産活用事業、学生のインターンシップなどお互いに協力して進めていくことがその目的です。それらの事業を進める過程で、小野市と加西市にまたがる青野原に第一次世界大戦当時、俘虜収容所が設置されており、そこにドイツ兵、オーストリア・ハンガリー兵合わせて500名ほどの捕虜兵が収容されていたことが明らかになってまいりました。その青野原俘虜収容所をめぐる神戸大学と小野市の共同作業の成果は、まず2005年10月から11月まで小野市好古館で開かれた「青野原俘虜収容所の世界」展で目に見える形で示されました。



俘虜製作品「刺繍」

個人蔵

神戸大学は人文学研究科（文学部）地域連携センターを中心に展示会の準備に協力いたしました。また、この展示会の関連事業として、青野原俘虜収容所でオーストリア・ハンガリー兵たちが行った演奏会を再現するという試みを神戸大学交響楽団の協力を得て、実現いたしました。

2008年にはオーストリア国家文書館の全面的な協力によって、ウィーンで展示会を開くことができました。同時に、ウィーンにある軍事史博物館で神戸大学交響楽団による「里帰り演奏会」も実現されました。神戸大学が進めてまいりました地域との連携と国際的な交流とが自然な形で結び合わされたこととなります。

今回の展示会は、日本の俘虜収容所体系の中での青野原俘虜収容所を考えることを視野に入れて、東京のオーストリア文化フォーラムで開催することにいたしました。一連の事業にご協力いただいた駐日オーストリア大使館、小野市、習志野市、ドイツ文化会館、防衛省防衛研究所、外務省外交史料館、鳴門市ドイツ館ほか関係各位に心より感謝の意を表したいと思います。



俘虜製作品「灰落」

個人蔵



俘虜製作品「煙草道具」

個人蔵



俘虜製作品「煙草道具」

個人蔵

小野市長 蓬萊 務

神戸大学と小野市、そしてオーストリア大使館との共同による「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」が開催できますこと心よりお礼申し上げます。折りしも今年は日本とオーストリアの修交 140 周年にあたり、この展覧会もその記念行事の一つとして認定をいただきました。このような機会に参加させていただいた、オーストリア大使館と神戸大学に心より感謝申し上げます。

小野市は、兵庫県南部、県下最大の河川、加古川の中流域に開けた田園都市で、東西を結ぶ大動脈中国自動車道と山陽自動車道の間に位置し、自動車で大阪・神戸から1時間の位置にあります。周囲を山と緑に囲まれ四季折々に美しい風景が見られる自然豊かな街です。古くから城下町として栄え、“そろばん”や家庭用刃物をはじめとする“金物”などを中心に発展してきましたが、今では電子機器や医療機器、精密機器製造などのハイテク産業が主な産業となっています。

小野市と加西市、加東市の3市が接する青野原台地に第一次世界大戦のドイツ・オーストリア兵俘虜を収容した「青野原俘虜収容所」がありました。小野市では、2005 年に神戸大学と社会文化に関する包括協定を結び、その一環として青野原俘虜収容所の調査を進めてまいりました。

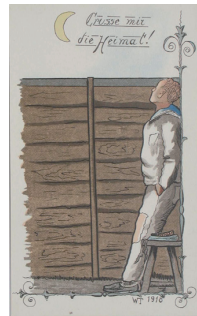
青野原俘虜収容所では、多い時で 500 名近くのオーストリア・ドイツ兵俘虜が4年4か月にわたって生活していました。身分や権利は保障されていたとはいえ、戦争の俘虜として過ごした日々はつらいものであったと思います。しかし、そのような中でも俘虜兵は、音楽やスポーツを楽しんだり、地域の高校とサッカーの試合を行うなど交流を深めていたことがわかってきました。この展覧会では、地域との交流を記録した写真や俘虜が制作した作品なども展示しています。

第一次世界大戦の終結から 90 年たった今、そして日本とオーストリアの修交140周年を記念した「日本オーストリア交流年 2009」開催の年にこのような交流の場が持てたことを大変喜ばしく思います。この展覧会によってお互いの国の文化や歴史への理解が深まり、日本とオーストリアの交流がますます深まることを願います。



俘虜製作品「刺繍」

個人蔵



俘虜製作品「絵葉書」

個人蔵



「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009 講演会・再現演奏会」

去る11月7日、ドイツ文化会館 OAG ホール(東京都港区)にて、「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009 講演会・再現演奏会」を開催いたしました。以下の関係研究者に講演していただくとともに、千葉県習志野市を拠点とする音楽家グループ「町の音楽好きネットワーク」及び神戸大学交響楽団有志の御協力の下、以下の曲目を演奏していただきました。

講演会 ～青野原俘虜収容所の世界～

大津留 厚

神戸大学人文学研究科教授。ハプスブルグ帝国史、オーストリア近現代史を研究分野としている。著書として、『青野原俘虜収容所の世界—第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵—』(山川出版社, 2007) などがある。

岸本 肇

東京未来大学こども心理学部教授。神戸大学名誉教授(元・発達科学部教授)。体育学、体育科教育を研究分野としている。論文として、「青野原俘虜収容所捕虜兵のスポーツ活動」(『体育学研究』50-3, 2005) などがある。

ヘルムート・ヘードル

オーストリア・グラーツ大学所属。自らと同じオーストリア人が収容されていた青野原俘虜収容所を修士論文のテーマとし、現在も研究を続けている。

再現演奏会 演奏曲目

町の音楽好きネットワーク

ヴァイオリンのための

1. 閉じておくれ 僕の眼を
ハンス・ミリエス 曲 / 伊地知元子 編曲
2. アイン・クライネ・ナハトムジーク
モーツァルト 曲
3. ホフマンの舟歌
オッフェンバック 曲
4. 舞踏への勧誘
ウェーバー 曲
5. 閉じておくれ 僕の眼を
ハンス・ミリエス 曲 / 伊地知元子 編曲 / 根本優子 訳詞

神戸大学交響楽団有志

1. 歌劇「バグダットの太守」序曲
ボワエルデュー 曲 / 田村文生 編曲
2. 巡礼の合唱(歌劇「タンホイザー」より)
ワーグナー 曲 / 田村文生 編曲
3. 美しき青きドナウ
ヨハン・シュトラウス2世 曲 / 田村文生 編曲
4. 劇付随音楽「エグモント」序曲
ベートーヴェン 曲 / 田村文生 編曲
5. レヴリ
ヴェータン 曲
6. 軍隊行進曲第一番
シューベルト 曲

2008 年

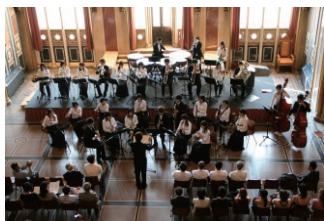
「青野原俘虜収容所 里帰り展覧会・演奏会」



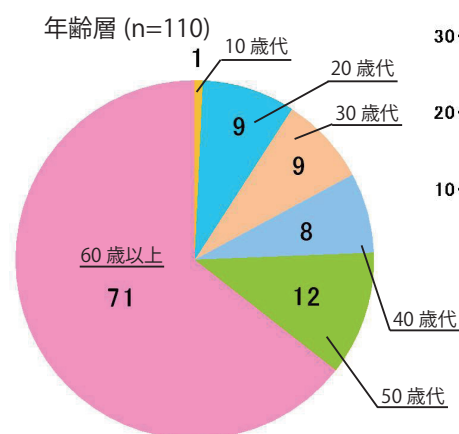
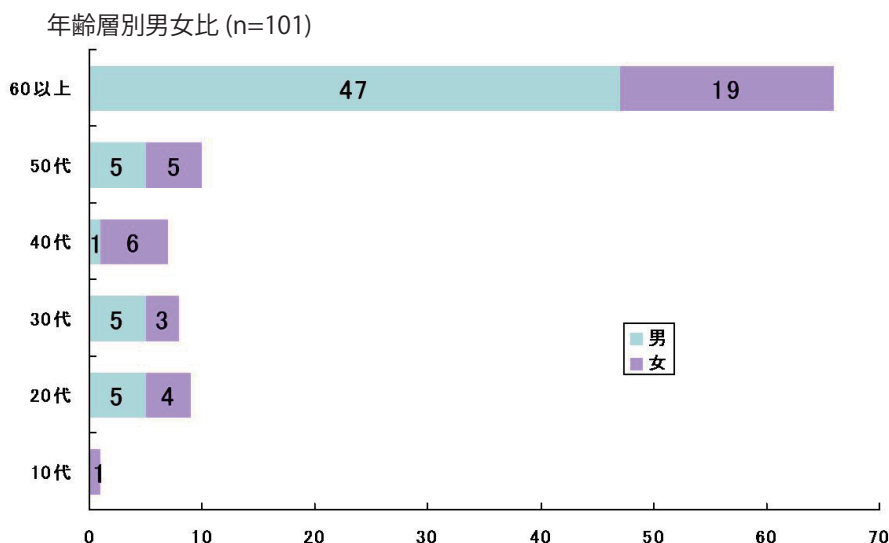
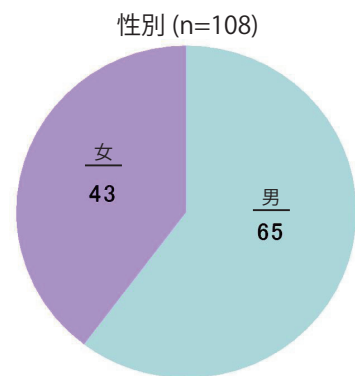
2008年9月3日から10月29日まで、俘虜兵の祖国の一つであるオーストリアの国家文書館で「青野原俘虜収容所里帰り展覧会」を行いました。これによって俘虜兵たちを「里帰り」させると同時に、オーストリアに存在する史(資)料も展示することで、国際的な学術交流にもつながっていました。

また、開会式を行った9月3日には国家文書館で、9月5日には軍事史博物館で、神戸大学交響楽団有志による再現演奏会が行われました。

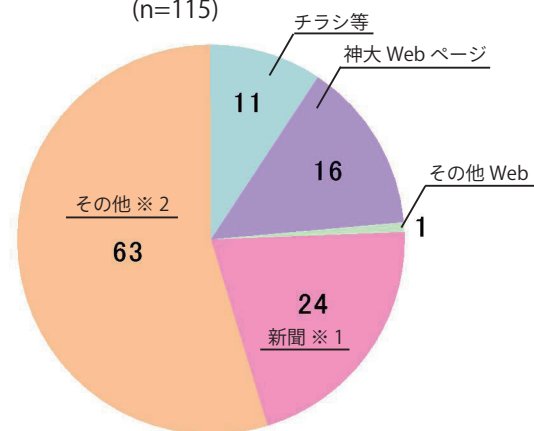
地域に残されていた資料から、地域と大学の連携が始まり、資料を生み出した俘虜兵の祖国であるオーストリアまでつながっていくという、まさに世界史の中に地域が位置づくという、時空を超えとも言える出来事に、地域連携事業の可能性を感じることができました。



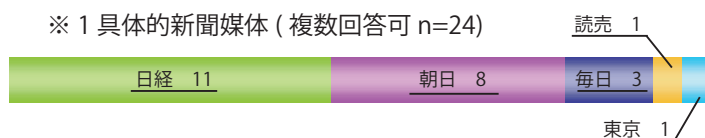
講演会・再現演奏会アンケート集計結果（回収数：117 名分）



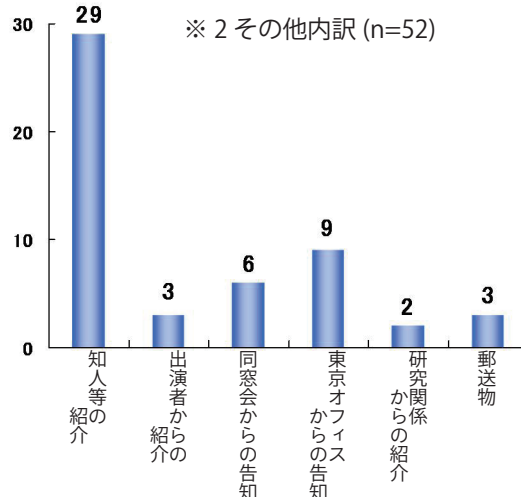
今回の催しをどこで知ったか
(n=115)



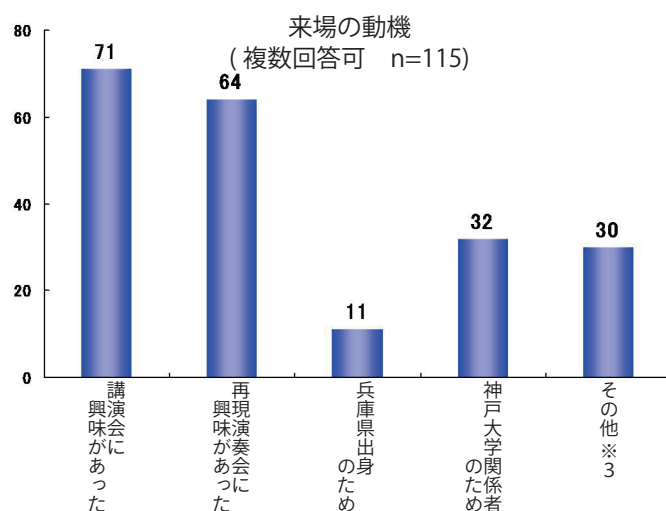
※1 具体的新聞媒体 (複数回答可 n=24)



※2 その他内訳 (n=52)

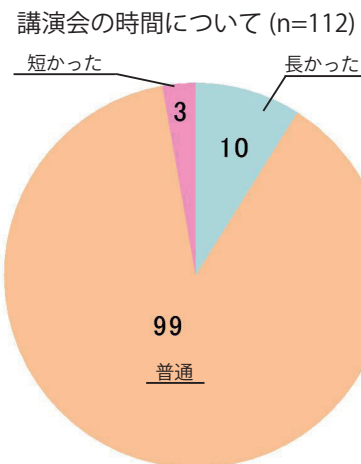
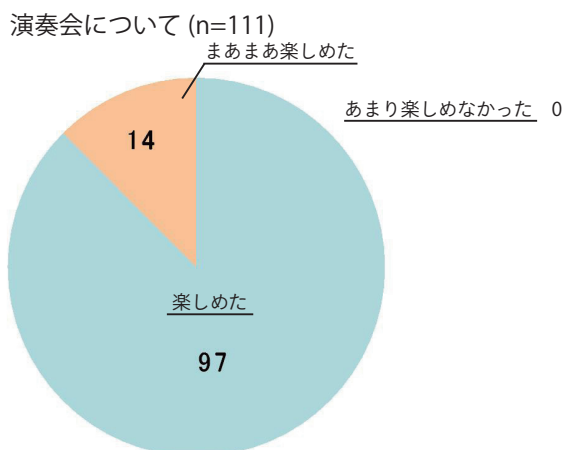
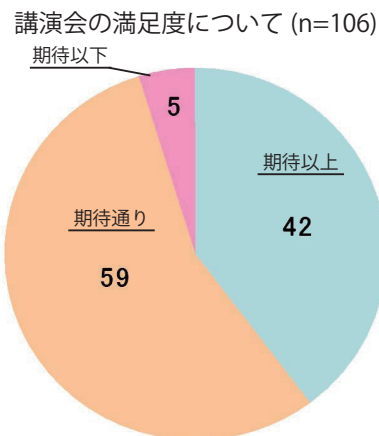
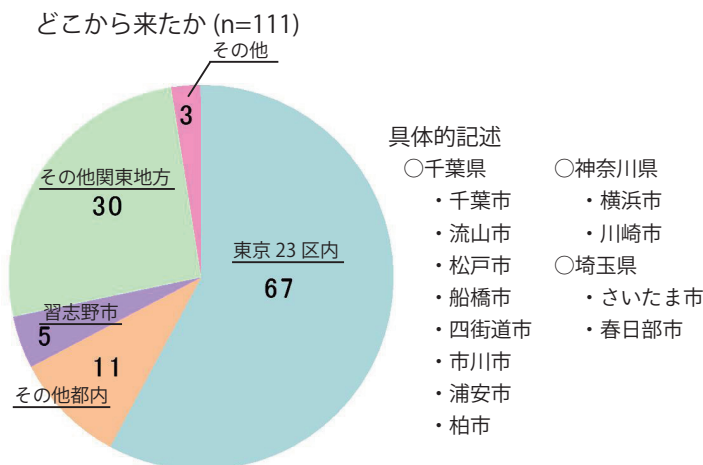


来場の動機
(複数回答可 n=115)



※3 来場動機 その他内訳

- ・ドイツ・オーストリアに興味があった。
- ・日独交流の歴史に関心があった。
- ・大津留先生の新聞記事に興味があった。
- ・捕虜の人々が日本人に広めた文化を知りたかった。
- ・シベリアで捕虜生活を送り、ドイツ兵病院収容所でドイツ兵にお世話になった。
- ・習志野及びその近辺に在住している。
- ・何のこともよく分からなかったため、それを知りたいと思った。



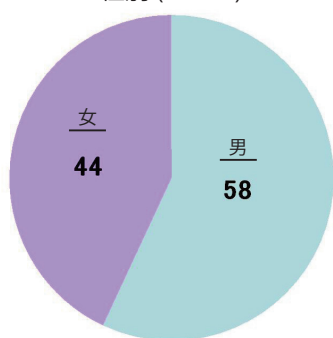
感想 (自由記述)

- ・「こういう文化交流もあったのか」という感想を持った。
- ・会場を和ませるような心づかいがあり、楽しく話を聞いた。
- ・関東の人間には小野市の位置が分からなかった。スライドで地図がほしかった。
- ・日本人は歴史的にも好戦的な民族ではない事がよく分かった。研究成果を伝え続けてほしい。
- ・俘虜達が文化的な活動をしていたこと、地域の人々と交流していたこと、と発見があった。
- ・収容所の評価は難しいと思う。国際法での評価、マイナス面等も掘り下げてほしかった。
- ・青野原の人達が収容所での交流をどう受け止めていたのかも聞きたかった。なぜこのような好待遇となっていたのかの理由、背景などがわかればもっと面白かった。
- ・スポーツや音楽だけでなく、料理の作り方等の文化面での普及の一端も教えてもらいたかった。
- ・それぞれの講演者が青野原俘虜収容所やそのきっかけとなった戦争に対してどのような意見を持っているか聞きたかった。
- ・板東収容所の本を以前に読んで第一次世界大戦の時にも収容所があることを知った。他にも収容所があることを知らなかったなので、新聞で見てぜひ講演会に行きたいと思った。第二次世界大戦の収容所とは比較にならないほど自由な豊かな生活だったようだ。
- ・興味本位の「写真紹介」を見せてもらっただけだった。「講演」なので、研究者の解釈、論理主張が聞きたかった。
- ・少し退屈だった。収容所内でのエピソード等があればよかった。
- ・バイオリンソロが特によかった。
- ・神大オケの演奏が若々しく、素晴らしかった。
- ・指揮者が女性故か、優しさが全体をおおっていた。
- ・演奏に若さがあつてよいが、もっと楽しんで演奏してほしい。音楽と学問を両立させて世の中を明るくしてほしい。
- ・習志野の音楽は収容所に由来しているのか。収容所であるように楽しんでいたとは驚き。
- ・収容所で演奏された曲目は、母国で一般的に演奏される曲目と違いはあったのか。俘虜あるいは望郷というバイアスが見られるのか。
- ・写真とナレーター、そして音楽演奏のコンセプトは非常によい。

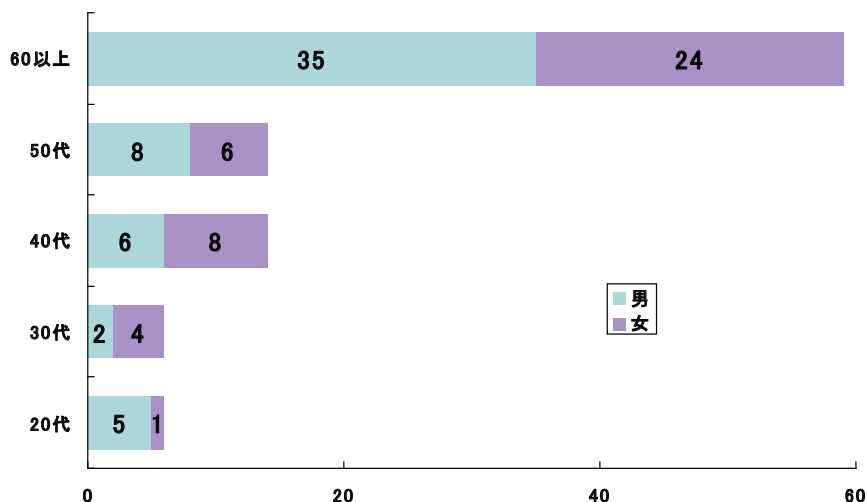
- ・100 年近く前に習志野の地にこんなメロディーが流れていたとは!
- ・視覚と聴覚の両方から刺激を受けてよかった。俘虜の中にこれだけ多くの音楽家がいたのなら、ヨーロッパはすごい。
- ・当時はどのようにして楽譜を入手していたのか。
- ・スライドを使つての演出はよかった。当時の収容所での生活を体験できた。
- ・収容所内での演奏会の雰囲気を感じることができた。結構リッチな生活だったと思えた。
- ・気合いが入っていてよかった。音楽は心を安らかにする。自分も捕虜生活時代に音楽を聴き、心に思うことで生きる力を得ていた。
- ・立派だった。音楽が出来るって素晴らしい。今後の活躍に期待。
- ・もう少し曲数を減らしてもよかったのでは。イスで同じ姿勢をとり続けるのに疲れた。
- ・当日、何度も電話したがつながらず、入れない覚悟で来た。連絡手段を考慮してほしい。
- ・大学と地域との協力関係の重要さが分かった。
- ・また東京でも講演会を開いてほしい。
- ・収容所というと、極めて悲惨なイメージを持つが、青野原での実態はほっとするような人間味を感じた。
- ・講演と演奏会、青野原と習志野の組み合わせということで全体的にも退屈しない素晴らしい催しだった。
- ・第一次大戦後のドイツ人捕虜に対する日本政府の扱いは、近代化を進める日本の世界に対するアピールがあったという記事を読んだことがある。板東等、他の収容所との比較もほしかった。
- ・こういう形で国際交流は素晴らしいと思う。研究は日々の地道な積み重ねだろうが、継続されることを願う。
- ・捕虜収容所と聞くだけで暗い運命を想像するが、当時の人道的扱いが非常に平和的理念に基づいていたのと、ドイツ・オーストリアひいては欧州の文化レベルの高さを思い知らされる一面を見た。楽器や歌曲、オペレッタという趣向を身につけているからだろうと思うが、この辺が必然的に強調されて我々に迫ってきた。
- ・第一次大戦での捕虜の生活の様子、日本国が捕虜に対し、強制労働などさせず、手厚く扱ったことが心に強く感銘した。

資料展示会アンケート集計結果（回収数：108 名分）

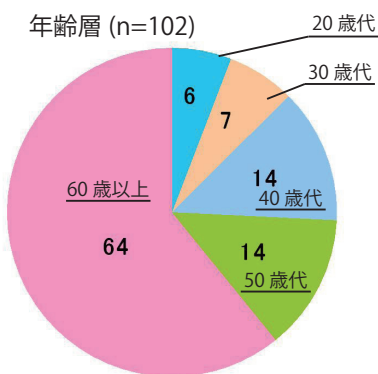
性別 (n=102)



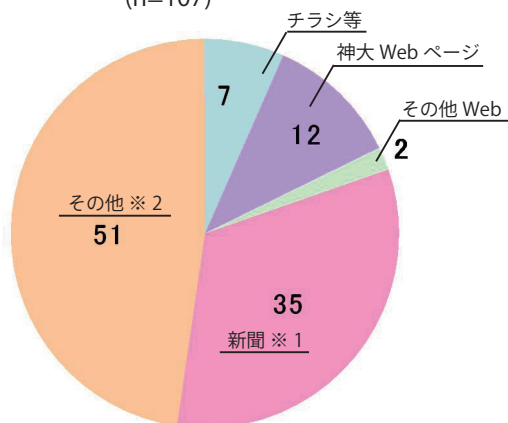
年齢層別男女比 (n=99)



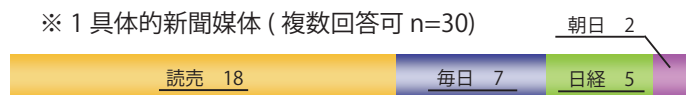
年齢層 (n=102)



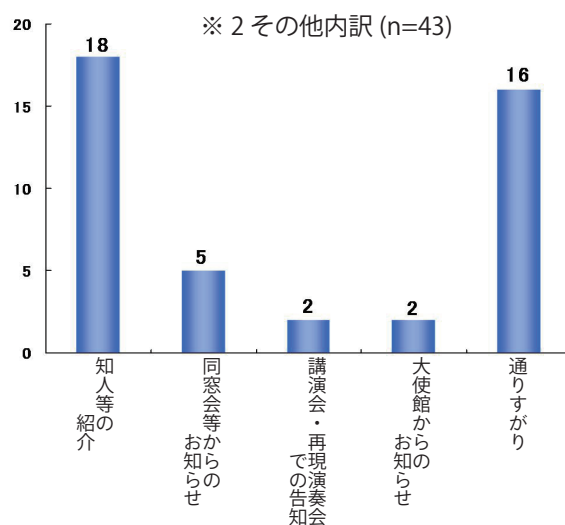
今回の催しをどこで知ったか (n=107)



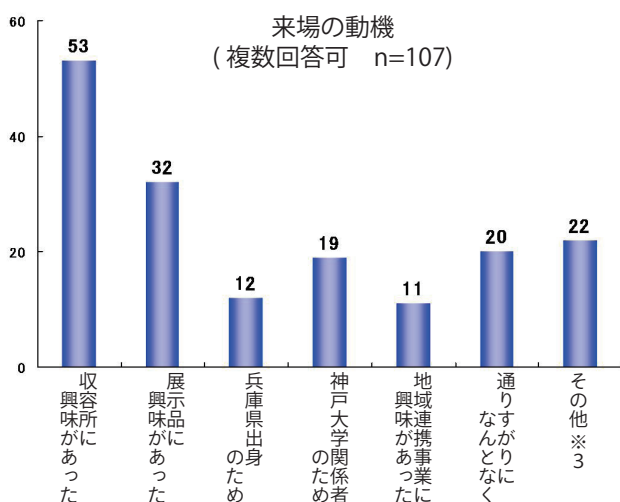
※1 具体的新聞媒体 (複数回答可 n=30)



※2 その他内訳 (n=43)

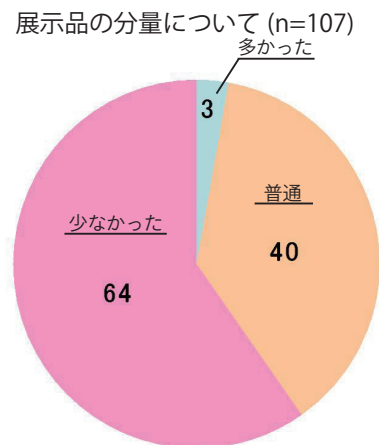
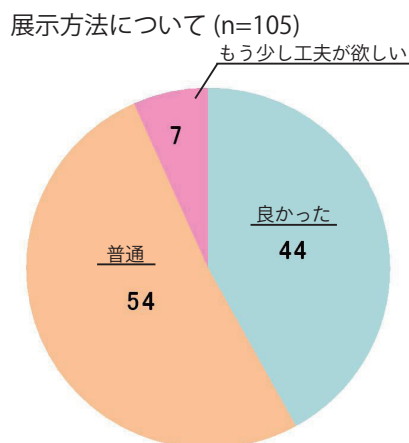
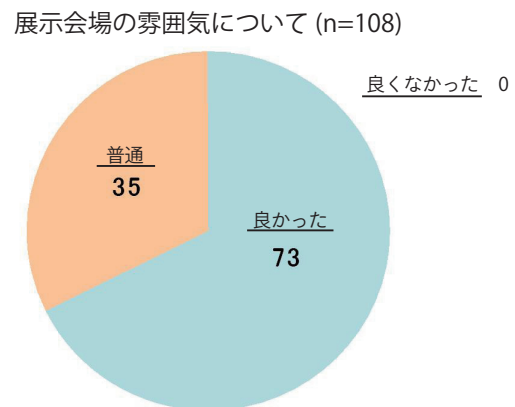
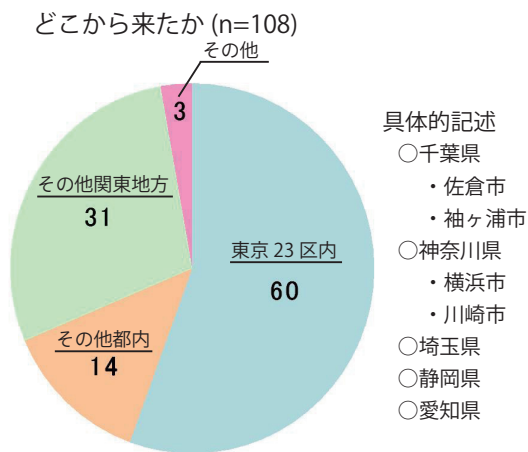


来場の動機 (複数回答可 n=107)



※3 来場動機 その他内訳

- ・外地にいて思うところあり。
- ・大使館内を見られるチャンスと思った。
- ・オーストリア、ドイツ語圏、ハプスブルク家に興味があった。
- ・当時の俘虜の生活を知りたかった。
- ・ドイツ語クラスの仲間に聞いた。
- ・第一次世界大戦に興味があった。
- ・自分がシベリヤで俘虜をしていたので懐かしかった。
- ・有形、無形文化財の研究をしているところであり、歴史に興味を覚え、過去の様々な事物の知識を得たいとの思いから。
- ・オーストリア訪問の予定があり、予備知識のため。
- ・日独協会の会誌より興味を持った。



感想（自由記述）

- ・大学と地方自治体が協力して歴史的事実を整理する企画は有意義。
- ・地域と大学の共同企画事業成功おめでとうございます。大学側から仕掛けてもっと各方面でこのような企画事業を。
- ・大学と自治体の地域連携事業だということは、訪れて初めて知ったので、その点もアピールしていれば、また異なるスタンスの来訪者も望めるのでは。
- ・新しい歴史の事実を知ることができた。
- ・先日、講演会に行った。そこで興味を持ってうかがったが、もう少し展示物があっても良いかなと思う。
- ・近くの小学校に展示のことを伝え、小学生が見学に来るなどしても良いのでは。
- ・写真等だけではなく「物」ももっと展示して欲しかった。無いのであれば、他の施設から借り受けることが可能だったのではないかな。
- ・スペースの制約があるのだろうが、生活に使われた道具等を見たかった。
- ・充実していたと思える規模で展示を見たい。今展だけだと“日本人は外国人俘虜に対して寛容だった”という印象が強いが、違った視点を与えてくれるものもあるかも知れない。とらえていた側から見た展示だから、なおさらそう思った。
- ・日本とオーストリアの歴史についてもっと知りたい。説明文は分りやすかったのでもう少し掘り下げた説明表示が欲しい。
- ・日本とオーストリアの関係について、過去の歴史も知りたいが、現在も知りたい。
- ・兵士の描いた絵ハガキに望郷の念が強く現れていて胸を打たれる。スペースの制約にもかかわらず簡潔に、青野原収容所の概要が兵士の生活も含めよく理解できた。
- ・絵ハガキは苦しさの中にほのぼのした雰囲気が表現されていた。
- ・パンフレットが立派であり、大変参考になった。絵ハガキの復刻は大変有難かった。
- ・戦争とは違う生活の一面を見ることができた。
- ・俘虜と地元の住民の交流が伺えてホッとしました。
- ・この展示で感じたことは捕虜を人間として扱っていたことである。最近しばしば捕虜虐待のことが問題になっている。悲しいことです。もう一度昔を振り返ってみる必要があると思う。
- ・当時の捕虜の言動が伝わる工夫を。展示のみでは伝わらない。日本全国で展示等を。もっと他の研究と合体して友好関係をにじませるとか。
- ・以前「バルトの楽園」という映画で板東収容所の様子を、作品を通して見たが、ここには当時の貴重な写真が多数展示されていて、よりリアルに感じた。
- ・第一次世界大戦と日本がこのような形でつながっていたことを初めて知った。もう一度歴史を学びなおさなければならなかったと感じた。
- ・当時日本が俘虜に対する処遇を適切に行っていることが読み取れ、誇りに感じた。
- ・歴史に埋没しそうな出来事をいつまでも後世に伝えて欲しい。



上：満員の OAG ホールでの大津留教授による講演
 左下：オーストリア文化フォーラムにて、一般開放直前の展示スペース
 右下：煙草道具、絵葉書の展示ケース



青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009

平成 22 年 1 月 18 日

発行：神戸大学地域連携推進室

編集：神戸大学研究推進部研究推進課研究・地域交流企画係

Address 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

Tel 078-803-5029

Fax 078-803-5049

e-mail ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp